

' 82.9月

井深 大 連続対談

見る“井深読本”を！

牛尾治朗（うしお・じろう）

1931年姫路市生まれ。新制東大の第1回生、カリフォルニア大学へ。64年ウシオ電機を創業、社長。財界若手論客としてひろく注目されている。井深さんとは「ヨウ、ドウシタ」の仲である。

「ハンドブック」がほしい

牛尾 井深さんのいわゆる幼児開発活動は、もう相当長い期間に及びますね。ようやく5、6年前から若いお母様方が関心を持ってきたようですが、実際にどうしていいかわからない。青年会議所なんかでも井深さんの本を読まれて、これをぜひ実践してみたいと10%ぐらいのお母様はその考え方を軸に自分でどうしようかということを考えるんだけど、過半数の人は目が覚めてから寝るまでの「時間表からテキストから皆欲しい」というんですね。それがないと、そんなこと言われたって、やりようがない。

たとえば、音楽教育を言うと、レコードまでセクションして、これを与えればちゃんとかういう子ができるだろうという、手法のノーハウじゃなくて、マテリアルまで全部マニュアル化してくれという希望が大変に多いですね。それが母親教育そのものの基本原点になるんでしょうけれども、その辺のところからひとつお話しを…。

井深 1番根本の教育というもの、たとえば大学教育というのは何のためにするかということだって、明快じゃないんですね。とどのつまり、学歴というものを一挙に拭い去れ、と言ってもなかなかできないでしょう。これらは全部出直して、これから生まれる子供から…というのが、私の考え方の基本なんです。

もう1つ大きなポイントというのは、生まれてから後だけの環境の与え方で、ほとんど全部決まってしまうと断定してしまっても、そう間違いないんだ、と。しかし、まだ生まれて直後、あるいは生まれる前からすぐの大切さというのが、まだ徹底されていない。これは世界じゅうがわかっていないんですね。教育教育というけど、全部が納得ずくの、意識した教育、いわゆる学校教育というのは考えるんだけど、生まれてすぐからのそういう環境を与えるという、意識以前の教育という問題をそれほどだれも突っ込んでいない。

お母さんが“すべてのノーハウを”と言われるが、時間だけの問題なんですね。早くスタートする。そしてその子供について、あるいは自分のうちの環境に応じて1つ1つのカリキュラムをお母さんが作り出していかなきゃならない問題だ。そこら辺の基本の考え方が、世の中では幼児教育というと早くから英語をやった方がいい、早くから音楽をやった方がいいというふうに非常に単純に考えちゃうんですね。性格なんていうものも生まれたときからのお母さんの考え方でそんなにも植えついていくなんていうことの恐ろしさ、重大さというものはさっぱり認識されていないような気がするんで、その実験をまずお母さんに呼びかけてやってもらいたいというのが私の念願なんですね。

牛尾 大部分の日本の若い父親も母親も、教育というのは文部省があって、義務教育が小学生の1年生から始まる。それまでは教育というか、子供を育てると感じの中には、いま井深さんのおっしゃったような重要な意味合いは全然なくて、国のつくった教育課程で教育すればそれでいいんだという発想で長い間来たんですね。

何事もおかみがきちんとやってくれて、それに従っていればいいんだという時代だった。それが、この10年ぐらいは、教育というのはみんながそれぞれ多様性を持って、持ち味

のあるものをするんだという傾向に変わってきた。だから、やっと教育というものがおかみのお仕着せではなくて、きわめて多様で個性的なものであるという意識を持ち始めた。そこへ“教育というものが実は小学校からではなくて幼児からだ。むしろゼロ歳からだ”ということがわかってきた。そのときに1番大事なのは、その辺のテンポは急テンポなものですから、自分の子供をどういう子供として育てたいかという、思想そのものもまだ十分にまん延していないわけですよ。やっぱり東京大学を卒業させて、学力優秀な子にしたいという…。

井深 牛尾さんみたいなものを目的にして…（笑い）

牛尾 手段を目的と勘違いしているわけですよ。要するに、その人の性格や、人柄や、人間としての生き方というものをつくるのがゼロ歳からだ。それには、自分の持っている、いまおっしゃったように家の文化や、伝統や、考え方を示せばいいんだと言うんだけど、実は父親も母親も、その辺について彼ら自身が十分考えていないところがあって、教育というのはだれかに預けることなんですね、幼稚園に出すとか、だれかに預けるとか。

井深 終戦後非常に悪かったのは、“自由主義の社会ではしつけることはタブーだ”と、みんなが言い出したこと。したがって、自由に放任して、自由自在にのびのびと育てなさいというのが、そのころの合言葉だった。ところが、アメリカさんが来て日本の教育基本法を設定するとき“家庭のしつけというものはすでにあるんだ”という前提のもとに日本の学校教育というものは考えられたわけだ。したがって、学校でしつけをしつらいかんとか、お仕置きをしちまいかんとか…一応ジェントルマンなり、レディとしてのものを持って1年生に入ってくるものとの考えだった。それからもう1つ大きな問題は、日本の家族主義でじいさん、ばあさんがいて、おのずから家風といったものが自然にあった。他人のことを考え、1つのルールに従うという、そういう中で生活をしてきた。それが、若い者は独立せにゃいかんということでお母さんと子供だけになってしまった。

牛尾 敗戦によって家風の権威までが崩れたんですね。

井深 そう、家族制度も崩れたし…。

牛尾 核家族になって、最近また家風の見直し運動が何か心の中にあるわけですね。結局、若いお父さん、お母さんの教育というものがとても大事になるわけですね。戦後のベビーブームの人がいまちょうど対象なんです、33、4ですから。JCもこのベビーブームの人が中核なんです。昭和22年から25年に生まれた人が、いまちょうど32、3、4ですからね。それが第二世代になっているわけですよ。つまり、親が自分の家風に自信をなくして、のびのびというふうに育てられてこないわけですよ、いまのお父さん、お母さんそのものが。それにしつけをしようとする、自分にとってしつけというのは何だったんだろうかと…。

井深 持ってないんだよね。

牛尾 そうなんです。そこで、井深さんのおっしゃる“しつけハンドブック”が欲しい、日本人はかくあるべきだというのが欲しい。ゼロ歳教育というものがすぐ出てくるんですよ。

「若親開発」ってタイトルは

井深 ところが、ゼロ歳でのそういうハンドブックというのは、いままではただ生かすことだけが育児だったんだ。赤ちゃんの場合は、愛情を含んだ行為というものがすべてを通じてオーバーオールに好きになってしまうんだ。そうすると、それがその人間の心の基本の支えになってしまうんだと、こういう考えなんですね。

牛尾 若いお母さんが、生まれたばかりの子供をペットをかわいがるようにかわいがり、若いお父さんが、子供が埋もれるぐらいおもちゃを買い与えるというのが、意外と多いんです。

井深 それは必ずしも愛情とは言えない。乳離れというのは動物的に非常に重要な時期なんですね。乳離れということは、独立した人間になる。1年間というのは、これは体外胎児と言われるぐらい不完全な状態ですからね。

牛尾 人間未熟児ですからね。

井深 ええ。そこで、カンガルーが自分の袋に入れて、抱きしめつづける愛情というものは、満1歳ぐらいになったら捨てるべきだと思うんですね。あらゆるところで愛情は持っているじゃないけれども、そういう具体的な行動で示すような愛情は、むしろ離れるべきだ。特に、おやじさんていうのは厳しさとか、真剣さで子供に示していくんだ。しかし、それはカラいばかりであってはだめだし、おやじさんが威厳を示そうとしてやったんでもだめで、その真意というのは子供がかわいいからという、そういう読み取りというのは2歳でも、3歳の子供でも十分それができるんだというのが、私の議論です。

牛尾 その辺のところが、逆に、みなわからない。確かに2代目に入っているんで、いまの父親、母親そのものが戦後に十代のしつけが解き放された世代なものですからね。そこでは何がしつけで、何を求めるべきか、こういうふう育てたいというのが混乱しているんだね。よく若い社員と、私は親になることのむずかしさを盛んに議論するわけです。どうしていいかわからないです、子供に対して。ちょっとまじめに考えている子というのは、父親としてかわいがるのはいいけれども、どうしていいかわからなくなってしまふという悩みの人がわりと多いですね。だから、幼児教育というのは、結局、幼児の親教育だね。

井深 そう。母親教育であり次は父親教育だね。京都大学の心理の山中先生が、マイホームパパの子供ってというのは、統計的に見るとだめだそうだね。うちに帰ってきて庭をやったり、手伝いしたり、子供をよく連れていっている。外で何しているかわからんけれど、一生懸命夜中になって帰ってくるようなおやじさんの方から出てくる子供の方が、総合点はあるかに上だという話だったけど。おやじさんが、自分の仕事を真剣にやっているかやっていないかということは、子供の性格には相当影響を及ぼすという。だから、おやじさんていうのは…。

牛尾 しじゅう家をあけていけばいいのか。

井深 そういうことじゃないな(笑)

牛尾 昔は、お母さんが、子供を背負って、一生懸命働いていた。洗濯も炊事も、背中に背負っ

てやっているじゃないですか。

- 井深** だから、ただお母さんの役割りというものが非常に重要なことであり、お母さんがちょっとでもその気になれば、それだけのことが出てきますよということを、1人でも多くのお母さんに知らせたい。どこにもそんな本は出ていないし、だれも言わないことなんでね。
- 牛尾** この「幼児開発」というタイトルだけ見ると、どの幼稚園が1番いいのかとか、どうすると慶応の幼稚舎に入るのかとか、そういうふうな中身にとるだろうね（笑い）。幼児開発で物を提供する相手は親なんだから、「若親開発」としたらいいね。ヤングマザー、ヤングファザーのディベロップメントですよ。

“ ボランティアを求む ”

- 牛尾** 結局、いま若い父親と母親が求めているのは、まずトレーニング体系ができて、テレビを見て、育児指導員がいて、欲しいときにはボランティアに相談できてって、みんなやりたいんですよ。ただ、どうしていいかわからない段階なんですよ。幼児開発協会がそういう母親学校をつくったらどうですか。“まず母親が自分で自分の子供のために集まりなさい。子供が4つになったら、次の子供の・・・”とね。
- 井深** 是非、JC に対してお願いしたいですね（笑い）。それもローカルなのをね。
- 牛尾** じゃ、青年会議所がまず、これから子供を持つであろう人たちの母親、父親を集めて、こういう考え方を実行したいという人さえ集めれば、中の訓練プログラムや何かは幼児開発が全部やってくれますか。その人たちが、自分の子供が幼稚園に入ったら、彼らがボランティアになって、これから子供をつくる人に対するボランティア活動をやる。
- 井深** そうなんです。それが望ましい。
- 牛尾** そうすると、4年単位でネズミみたいにふえるわけですよ（笑い）。
- 井深** それは、言い直せば、日本というものをがらっとよくしてしまう。
- 牛尾** いいですね、15年ぐらいで効果が出てくるんじゃないですか。人さえ集めれば、中身はできているわけですから。
- 井深** 中身と云ってそう複雑じゃないですよ。こういうふうな抱けとか、こういうふうな顔を見詰めるとか、本当の愛情が流れている生まれたときからの子供の扱い方、育て方であって・・・。
- 牛尾** それで1年たったら乳離れさせると。ともかく幼稚園じゃ遅過ぎるんだよね。それをペットのようにかわいがるだけなんだよ。
- 井深** 1年間はそっと寝かせておけという思想が非常にある。それが1番悪い。1年間たって片言を言うようになるとかわいいものだから、一生懸命抱きしめてというんじゃ、それは甘やかし以外の何ものでもない。だから、6ヵ月ぐらいのときからある程度のしつけというものがスタートしなきゃならない。
- 牛尾** あなたが東京 JC で奥さんを集めればいい。とりあえず100人集めたらいいでしょう。そ

れを聞いて、またボランティアになりたい人も来いとね。

井深 場がないんですよ。それと、何かちょっと外国のと違うんですよ。この間ベネズエラで「どうしているのか」って聞いたら、みんな妙な顔をするんだね（笑い）。あたりまえだと思っている。そこが日本と違う。私は本当に恥ずかしかった。

牛尾 ぼくは日本でも集まると思いますよ。だって、幼児開発の話は相当行き渡っていますよ。入口までは来るんだけど、そこからどっちへ行っていいかわからないわけですよ。JCにはこれは最適の運動ですよ。それから、当世風にいうと、井深さんの幼児開発の話は劇画風を書くんだね。

井深 劇画風に？ 本にする？

牛尾 半分絵にするんですよ。このごろの人って活字を読まないんだから、劇画風にすればきつと普及する。井深さんの本を徹底的に製作者が読み、吸収したシナリオを書いて、井深さんがごらんになって「これならいいだろう」ということで劇画にしたら、一遍に売れますよ（笑い）。

井深 それはいいこと聞いたな。

牛尾 それと、ご専門のビデオですよ。本を読まなくても、45分のビデオを見れば大体考えがわかるようにプロデュースしてつくらせたらいいでしょう。やっぱり井深さんの本なんか大人が見ててわかる論理でね。それから、「実験」という言葉は絶対使っちゃだめですよ。恐がるんですよ（笑い）。「とんでもない、うちの子供を実験の材料にできません」と言う。あなたは必ずそうしなさい、必ずいい子ができるって言ってあげないと。「実験」というのは絶対だめなんです。井深さんが研究者であり、技術屋の発想なんです（笑い）。井深会長の表現はやっぱり研究者の説明だから、実験というのは何の抵抗もないけれども、母親というのは実験なんて言われると、それだけで拒否しますよ。

井深 ハイ。以後気をつけます。

牛尾 よろしい（笑い）。

井深 幼児教育の話をも牛尾さんなんかと話して何になるかと思ってたけど（笑い）。

牛尾 世の中に対する説得力がね。ぼくらは若いですからね（笑い）。

おわり